アディダスで正しいテクニックを身につけたい。

3155 Napoli
ナポリ
●ベロアレザー甲皮●赤×白
●シェルソール
¥8,500(標準小売価格)

3150 Athen
アテネ
●ベロアレザー甲皮●青×白
●シェルソール
¥8,500(標準小売価格)

デンマーク・ワールドチャンピオンシップでも、優勝ドイツチームを始め、世界16ヶ国の代表選手の78%もがアディダスハンドボールシューズでした。そのヒミツは、誰にも負けない経験と実績、そして技術開発力を背景に、世界のトップ選手のアドバイスを商品開発にダイレクトに生かしているからに他なりません。ストップ、ターン、グリップに理想的なアディダス独自のソール設計。足への文句のないサポート感。加えて、足を良く守るヒールカウンター、パッド…。大切なゲームであなたに必要なのはこのアディダス機能です。

The all-sports people

adidas®
The science of sport.



●お求めはadidas特約店で

発売元 KSG 兼松スポーツ用品株式会社 〒532 大阪市淀川区木川東2−5−3 ☎06・305−1431 〒130 東京都墨田区緑2−12−3 ☎03・634−1411

日本×中国、「モスクワ」かけ激突

第1戦・12月7日名古屋市体育館
第2戦・12月9日駒沢屋内球技場

モスクワ・オリンピック男子アジア大陸代表権をかけて、いよいよ日本×中国が激突することとなった。IOC（国際オリンピック委員会）は、11月26日、IOC委員89名の郵便投票の結果「中国のオリンピック復帰」を正式に決定した。これにより、IHF（国際ハンドボール連盟）は、本誌前号緊急速報のとおり、中国を、11月27日付で、会長権限により「仮加盟国」とし、モスクワ・オリンピックへの道を開いた。

これよりさき、11月17日から台湾で行われた「モスクワ・オリンピックアジア地域予選」で、日本男子は予想どおり4戦全勝、首位の座についた。

この結果、IHF指示による「モスクワ・オリンピック男子アジア代表決定戦」は、日本×中国の顔合せに決まり、日本協会は、11月26日夜、東京で緊急常務理事会を開き、代表決定戦の日程を、

一、第1戦、12月7日午後6時30分、名古屋市体育館

一、第2戦、12月9日午後3時、東京・駒沢屋内球技場

とすることに決定した。中国男子の来日は13年ぶり2度目となる。

また、全日本男子・竹野奉昭監督は、11月28日、代表決定戦に出場する全日本男子の候補選手を別掲のように発表した。レフェリーはノルウェーのペアの予定である。

予想どおりの対決、日本やや有利の下馬評とはいえ、かつて、日本のナショナルチームの周辺をこれほどまでに緊張させたことがあるだろうか。

8年前のミュンヘン・オリンピック予選の時でさえ、相手となる韓国、イスラエルの手の内が読め、オリンピック初参加を前にしたこれほどの緊迫ムードはなかった。

今回は、つい1カ月前、アジア選手権での勝利（27—25、本誌4頁参照）がありながら、それでいての息苦しさである。

一つには、中国のオリンピック予選参加が、日本チームにとって降ってわいたようなできごとであったこと。

一つには、アジア選手権で勝ったとはいえ、中国の実力がけして軽視できないものであること。

一つには、日本が、アジア選手権—アジア予選と、この1カ月、息つくヒマもないハードスケジュールに追われ、全選手のコンディションに不安がもたれることなどが原因だ。

しかも、11月末になって、アジア選手権に臨んだ中国のメンバー（別掲）は必しもベストメンバーではないのでは、といった〝無気味な情報〟も、とびこんできた。

しかし、日本は、どうしても勝たなければならない。

選手たちも燃えている。やはりアジア選手権での中国戦を、相手のホームコートで、一万余の観衆に囲まれて、勝ちとった自信が大きい。

また、今春来、ヨーロッパ戦をはじめ、西ドイツシリーズ、オーストリアシリーズで「全日本」としてのガッツが、各選手に植えつけられた。

懸念はやはり体調だ。11月24日の帰国から12月1日合宿集合、さらに7日の第1戦までいかに、個々のコンディションが復調しているかがカギ。

この面さえ、整っていれば、ミュンヘン—モントリーオール—モスクワと、3回連続オリンピック出場の宿願は、確実に、手中とすることができよう。

「既定の事実として判断」

「中国参加問題」で荒川理事長語る

本誌前号緊急速報のとおり、中国男子のオリンピック予選参加は11月6日、IHF筋から突然、明きらかにされたものだが、11月13日、南京でのアジア選手権から帰国した日本協会・荒川清美理事長は、次のように語った。

「中国スポーツ界の国際復帰は既定の事実であり、ハンドボールもそうなることは、時間の問題であった。

IHF未加盟という資格に疑問があったが、それが解消されればなん中国の参加を拒む理由は、なんらない。

台湾での予選勝者×中国という方法も、今回に限っては止むを得ない。すべて、〝既定の事実〟という判断に立って、日本協会も、了解した」。

アジア代表決定戦 全日本男子候補選手

・監督	竹野 奉昭	（強化委員）	
・コーチ	東 嘉仲	（強化コーチ群）	
・GK	井藤 英忠	（日体大）	185cm
	大畑 孝広	（本田技研鈴鹿）	183
	岡部 大	（大崎電気）	182
	福井 秀人	（湧永薬品）	180
・FP	蒲生 晴明	（大同特殊鋼）	192
	斉藤 将一郎	（湯沢ク）	187
	志賀 良弘	（湧永薬品）	187
	池ノ上 孝司	（湧永薬品）	185
	生駒 靖夫	（湧永薬品）	185
	中本 満明	（大同特殊鋼）	184
	津川 昭	（湧永薬品）	180
	穂積 豊彦	（湧永薬品）	180
	関 健三	（三陽商会）	180
	山本 伸二	（湧永薬品）	178
	大原 真造	（大同特殊鋼）	176
	柳川 実	（大同特殊鋼）	175
	斉藤 幸司	（大崎電気）	174

同・中国メンバー（予想）

・監督	黄 清光		
・コーチ	陳 梅全		
・GK	刘 貴	（24才）	191cm
	謝 継勇	（24）	184
	周 森林	（24）	179
・FP	陳 志軍	（24）	192
	李 太平	（25）	191
	張 新安	（26）	190
	呉 明群	（24）	190
	金 百煉	（26）	187
	宋 安文	（21）	187
	王 雄	（23）	186
	張 生	（21）	186
	曺 九立	（22）	185
	郭 宁生	（27）	183
	夏 抑	（24）	182
	李 英才	（25）	179

オリンピック予選・速報

日本女子、韓国への雪じょく成らず

日本女子は健闘空しく、昨夏につづいて、韓国の前に散った――モスクワ・オリンピックアジア地域予選は、11月17日から23日まで台湾（第1次リーグ・高雄市国光体育館、第2次リーグ・台北市立体専体育館）に、男女とも日本、韓国、台湾の3カ国が参加して行われた。

日本は、男子が、韓、台両国の善戦にあいながらも地力の差を発揮、4戦全勝、IOC復帰を待つ中国との代表決定戦（1頁参照）に備えることとなった。

しかし、女子は、すべてを投げうって挑んだ韓国戦で、相手のパワーに撥ね返され、オリンピックへの夢を絶たれるという無念の結果となった。

〝優勝〟した韓国女子は、来年3月コンゴで開かれる「3大陸代表決定戦」に出場、オリンピック初参加の夢をかける。

なお、日本選手団（男女）は、11月24日空路帰国した。

第1次リーグ

◇第1日（11月17日・高雄）

▽男子

日本 30（12−9, 18−6）15 台湾

【日本】		得
K	福井	0
K	大畑	0
F	津川	4
F	大原	3
F	柳川	4
F	蒲生	5
F	穂積	3
F	斉藤幸	2
F	斉藤将	2
F	志賀	0
F	中本	0
F	生駒	7
	PT	(3)
		30

○…日本は津川の先制連続ゴールで好スタート、23分には17−2と開く快調さだった。

ところが後半、考えられぬ凡失がつづき12分間無得点。GK大畑の奮戦はあったものの15分20−10と点差を詰められる不出来な試合となった。

▽女子

韓国 28（17−4, 11−7）11 台湾

後半の反撃もとどかず

◇第2日（11月18日・高雄）

▽女子

韓国 17（8−11, 9−4）15 日本

【日本】		得
K	山本	0
K	矢部	0
F	松下	2
F	加藤	3
F	河田	3
F	島田	1
F	中川	2
F	金田	3
F	宮平	1
F	穂積	0
F	染谷	0
F	小島	0
		15

○…日本は、先制点こそ奪われたが、すぐに互角となり、期待のもてるスタートだったが、そのあと、好機に放つロングシュートが再三、バーに当たるなどの不運がつづき、それを逆に持ちこまれて失点、思わぬ点差の前半となった。

後半、日本は、ようやく、攻撃のリズムがととのい、じわじわとスコアを詰め、同点に追いついたが、その直後、無雑作な守りをみせて2失点、結果的には、せっかくの反撃を空しいものにしてしまった。しかし、後半の攻撃力なら第2戦での逆転が可能であろう。

▽男子

韓国 32（13−13, 19−8）21 台湾

リード後にもたつく

◇第3日（11月19日・高雄）

▽男子

日本 25（11−8, 14−8）16 韓国

【日本】		得
K	福井	0
K	井藤	0
F	津川	7
F	関	3
F	蒲生	3
F	山本	5
F	穂積	1
F	大原	2
F	柳川	0
F	斉藤幸	1
F	斉藤将	3
F	中本	0
	PT	(3)
		25

○…この日も日本の試合ぶりは竜頭蛇尾。12分6−1と文句なしの先行だったが、このあと、韓国の粘りにあって20分8−5と詰め寄られた。

しかし、そのあと津川の闘志にあふれたプレーなどで再び点差を拡げ、余裕を保った。

後半、蒲生のシュートをGK林に読まれ追加点が伸びず、楽な展開ではなかったが、残り5分、斉藤(将)のポスト、関のジャンプショットで止めを刺した。

▽女子

日本 41（18−5, 23−4）9 台湾

【日本】		得
K	山本	0
K	矢部	0
F	加藤	4
F	松下	8
F	穂積	5
F	中川	9
F	河田	2
F	島田	6
F	金田	3
F	宮平	1
F	吉田	0
F	小島	3
		41

○…次の韓国戦に勝てば、得失点差の勝負。前日の惜敗を振り払うような日本の試合ぶりは、圧倒的なものがあった。

第2次リーグ

◇第4日（11月21日・台北）

▽男子

日本 29（14−11, 15−7）18 台湾

○…「試合ごとに調子が落ちる」と表情をくもらす竹野監督。攻撃がまったくリズムにのれず、動

女王の座奪回へ,きょうにもスタートを

女子は残念なことに、日本のパワーアップもさることながら韓国の世界選手権出場による自信と、韓国女子界全般の盛りあがりのほうが完全に、しのいだ。日本は第1次リーグの韓国戦2点差の惜敗直後、台湾戦を41—9という記録的な大差でとった。

このスコアに接した時、記者は、韓国2回戦での雪じょく——逆転を秘かに期待した。

1回戦での敗退が、各選手にあまり響かず、むしろ、2回戦への景気づけになったとみたからだ。結果的に、これは甘かった。現地から遠く離れ、外電だけを頼りにする悲しさでもあった。

第2戦の完敗は、日本の淡い希望、甘い現情を、完ぷなきまでに打ちのめすものであった。残酷なようだが、むしろ、この負けかたは、よかったとさえ思う。

いま、日本ハンドボール界がなすべきは、この屈じょくを、どう反省し、2年後の世界選手権予選にどう活かすかだ。その目標へ向かって、きょうにもゼロからのスタートを切らねばならない。

選手たちには、心からのねぎらいを送りたいが、この口惜しさを知る選手が、一人でも多く、82年の世界選手権、84年のロスアンゼルス・オリンピックまで残ってくれることを望めぬものか。

この予選を最後に、全日本のユニフォームを脱ごうとする選手たち、本当にご苦労さま。後輩たちが、雪じょくを遂げる日の近いことを、信じて待っていて欲しい。

◇

男子は予想どおりの全勝だったが、韓国、台湾のレベルアップは、注目すべきものがあったようだ。

さらに第2次リーグでの日本の拙戦は、韓、台両国に、今後への自信を与えるものといえる。

すべての原因を、アジア選手権—アジア予選とかけ持ちさせた強行策にあるとはいわないが厳冬から真夏のような地への転戦は、あまりにも無暴であった。

このハンデ、中国戦までに払いのけられるのか、どうか。疲れの色濃い全日本男子。気力が頼りである。

技術的な試合のポイントは日本のディフェンス×中国の攻撃力ということになりそうだ。（S）

【日本】		得
K	大畑	0
	福井	0
F	蒲生	5
	斉藤将	1
	斉藤幸	4
	関	1
	志賀	1
	津川	2
	穂積	3
	山本	3
	生駒	4
	大原	5
PT	（5）	29

きがバラバラで、集中力に欠ける台湾も着実に力を伸ばし、日本の守備陣が少しでも気をゆるめると攻めこんできた。

▽女子

韓国 23（8—7、15—8）15 台湾

韓国の先制攻撃受ける

◇第5日（11月22日・台北）

▽女子

韓国 22（13—5、9—9）14 日本

【日本】		得
K	山本	0
	矢部	0
F	加藤	2
	穂積	0
	河田	3
	松下	3
	中川	1
	島田	0
	染谷	0
	宮平	2
	小島	3
	金田	0
		14

○…試合開始すぐ、日本はPTを課せられ、1点を失った。第1戦とのトータルが、これで0—3。いきなりハンデを拡げてしまったこの失点が、すべてを決めたようなものだ。

選手は明きらかに動揺、追撃に焦り、攻守のバランスを失なって点差は開くばかりだった。

前半20分すぎ、韓国ベンチは「勝利を確信」したようだ。

韓国の攻撃力は、昨冬、世界の舞台を踏んだことで、いっそう切れ味がよくなり、特に李相玉の多彩なパスワーク、李京姫のシュート力は抜群。

▽男子

韓国 31（13—8、18—13）21 台湾

残り5分、山本で逆転

◇第6日＝最終日（11月23日・台北）

▽男子

日本 26（12—14、14—10）24 韓国

【日本】		得
K	福井	0
	井藤	0
F	津川	3
	穂積	5
	蒲生	6
	山本	5
	関	2
	大原	3
	生駒	0
	斉藤幸	1
	池ノ上	0
	斉藤将	1
PT	（3）	26

○…日本は、残り7分20—22の劣勢から24分大原、24分18秒蒲生でようやく同点。25分山本がなだれこんで23—22と逆転に成功、26分大原の速攻で24—22としたリードをなんとか保って辛勝。

日本の出足は、けして悪くなかったが、相変らず切れ味がないままに過ごし、前半16分9—6からあっという間に、相手のペースとなってしまった。

韓国は11—12から連続3ゴールで14—12として前半を終えたのだから好ムード。

後半11分には20—16と4点差をつけ、日本ベンチを慌てさせた。

終盤、日本はなんとか辻つまを合わせたが、明きらかに、アジア選手権からの疲れがのぞく、最低の試合ぶりであった。

【男子順位】①日本4戦全勝②韓国2勝2敗③台湾4敗

▽女子

日本 28（14—6、14—9）15 台湾

【日本】		得
K	山本	0
	井村	0
F	中川	5
	島田	8
	松下	2
	加藤	1
	宮平	2
	染谷	2
	吉田	1
	水上	4
	伊藤	3
	小島	0
		28

【女子順位】①韓国4戦全勝②日本2勝2敗③台湾4敗

（注）女子は、中国の参加がないため、韓国がアジア代表として来春の3大陸代表決定戦に進出。

韓国、台湾オールメンバー（数字は身長cm）

【韓国男子】			【台湾男子】		
K	林圭夏	186	K	童建文	176
	金良鉉	183		徐瑞源	175
F	李康皓	187		林秋景	175
	姜徳寿	177	F	郭守中	170
	朴賛応	182		陳文博	170
	金甫洙	175		黄育承	170
	李尚雨	184		黄期嘉	170
	高正圭	174		紀昭印	186
	朴敬守	174		楊国煌	180
	金樺訣	186		李源坪	170
	林英喆	176		余宏鵬	180
	金光洙	177		伝嘉忠	170
	崔太燮	181		黄貴源	172
	李柏孝	180		余健琿	188

【韓国女子】			【台湾女子】		
K	姜奉淑	167	K	蕭雪芳	171
	丁順福	169		劉美貞	164
F	李相玉	166	F	楊美芳	166
	李京姫	170		王月琴	161
	韓相美	163		鄭懐敏	167
	李茎子	163		黄恵敏	176
	金正富	172		張冀萍	167
	金昌順	169		陳桂香	166
	柳京美	167		顧玉玲	171
	張泉娩	169		劉麗淑	164
	金美淑	163		記淑紗	158
	崔銀栄	169		廖雪霞	163
	金玉花	164		劉月桃	173
	李明淑	164		黎模文	167
	李仁淑	172		黄秀慧	166

第2回アジア選手権

日本、連続の金メダル飾る

中国に27―25

第2回アジア選手権（男子のみ）は、11月3日から8日まで、中国の南京市・五台山体育館に、日本、中国、クウェート、インド、パレスチナの5カ国が参加して、1回総当り戦法式で行われた。前回優勝の日本は、大会第1日中国のオリンピック予選参加(注・国際オリンピック委員会復帰が条件)が決まったこともあり、各試合、慎重な試合運びをみせ、クウェートら新興諸国を、まったく寄せつけなかった。

一方、中国も、積極的なヨーロッパとの交流の成果を示して連勝、最終戦、3勝同士の「日×中」戦が〝決勝〟になった。

闘志を燃やす日本は、スタートから、多彩な攻撃を展開、20分10―7とリード、この優位を巧みに活かしながら、後半、いちどは7点差をつけ、連続金メダルを動かないものとし、終盤、中国の追撃を許して27―25とされたものの完勝、大トロフィを獲得、いぜん、アジアでナンバーワンの座にあることを、誇示した。2位中国、以下クウェート、パレスチナ、インドの順。

なお、大会には、バーレーン、ホンコン、レバノン、パキスタン、アラブ首長国連邦から役員が派遣され、開会式の入場行進に参加した。

第3回大会は、明後年に開かれる予定だが、インドが開催地の候補にあげられている。

日本選手団と岡前義春審判員は、11月13日夜、元気に帰国した。

荒っぽいパレスチナ

日本の第1戦・パレスチナとの試合は、11月3日午後7時30分から行われた。

日本 29（14―7 15―7）14 パレスチナ

○…前回の経験からも、固くなる相手ではなかったが、立ちあがり日本はリズムに乗り切れず、スピードを欠いた。

しかし、1分40秒、2分、3分と蒲生の連続ゴールで優位に立った日本は、しだいに調子を出し、10分7―1と、はや、勝負の行方を決めた。

得	【日本】			【パレスチナ】	得
0	福井(湧永)		GK	ビ ピ	0
0	岡部(大崎)		GK	サ ベ ト	0
4	津川(湧永)		FP	ア チ ヤ	1
9	蒲生(大同)		FP	ジ ャ マ ル	0
4	関(三陽)		FP	ヤ ニ ス	2
4	山本(湧永)		FP	ナ ジ ャ ル	4
1	穂積(湧永)		FP	アル・ハ キ ン	3
1	斉藤幸(大崎)		FP	R・アブルラサク	0
3	池ノ上(湧永)		FP	マ リ エ	0
0	中本(大同)		FP	ダ ヘ シ ュ	2
3	斉藤将(湯沢)		FP	タ ヘ ル	1
0	生駒(湧永)		FP	I・アブルラサク	1
29	(1)		PT	(7)	14

ところが、このあたりから、レフェリーの笛があやしくなり、次々とPTをとられ、「20―5」ぐらいとみた前半は、結局、8点リードにとどまった。

後半も、同じような展開だったが、パレスチナの突進の荒さが目立ちはじめ、生駒など、バッティングにあって三針も縫うほど。15分23―10と開いたところで、大事をとってペースダウンさせた。

（東　嘉伸＝全日本コーチ）

日本の速さにインドつけず

同第2戦・インドとの試合は4日午後7時30分から行われた。

日本 44（21―4 23―4）8 インド

得	【日本】		【インド】	得
0	福井	GK	アメド・ダル	0
0	岡部	GK	ナ イ ド	0
8	関	FP	マ デ レ ド イ	0
3	斉藤幸	FP	アリ・ハサン	0
4	穂積	FP	H・シ ル	2
3	津川	FP	ダ ル ニ	1
9	蒲生	FP	ゴ ウ ル	2
4	池ノ上	FP	サ ン ド	2
2	中本	FP	シャルマ	0
5	山本	FP	マシューズ	0
6	志賀	FP	スワミー	1
0	斉藤将	FP	ラ ム	0
44	(6)	PT	(1)	8

○…初見参のインドの力は前日のクウェート戦で判っていたものの〝初対戦〟というのはイヤなもの。

早いところ、ペースをつかもうと、スタートからスパート、1分山本のゴールを口火に10分8―1 20分14―3。

インドは、バスケットボール型のプレーで、思ったよりディフェンスは固かったが、日本が速攻をみせると、なんらなす術がなく、試合にならなかった。（東）

ディフェンスに力つく

同第3戦・クウェートとの試合は7日午後8時50分から行われた。

日本 27（13―4 14―5）9 クウェート

○…前日中国に20―22と食い下ったクウェート。はじめて手応えのある相手に会えるぞ、と思ったが、クウェートのスピードでは、まだまだ、日本のディフェンスは切り崩されない。

得	【日本】		【クウェート】	得
0	福井	GK	アル・バリ	0
0	井藤	GK	カミース	0
3	津川	FP	フ ア ラ イ	2
6	蒲生	FP	I・マホメド	0
5	穂積	FP	チ ア ブ	0
0	関	FP	アブドル・ナビ	1
4	山本	FP	アル・アンジャリ	2
3	生駒	FP	シ ヤ ー	0
4	池ノ上	FP	アル・タバク	3
1	斉藤幸	FP	R・ハサン	1
1	志賀	FP	A・K・シヤ	0
0	中本	FP	アル・ランディ	0
27	(4)	PT	(4)	9

しかも、GK福井が、PTを6本も止めたため、すっかりクウェートは戦意をなくした。

あとから聞くと、エースのアル・カサールが中国戦で負傷、この試合に出られなかったため、始めから、勝負は二の次だったらしい。

日本は、しだいに調子が上ってきており、山本、蒲生らが矢次早に強シュート、生駒、池ノ上の両新鋭も好プレーをみせた。

特に、ディフェンスは、9月のオーストリアシリーズ以降、一つの型が出来はじめており、前、後半とも10分以上無失点のシーンが各1度あったのは、たのもしい。（東）

あなどれぬ中国の粘り

同第4戦(＝最終戦)・中国との試合は、8日午後8時15分から行われた。

日本 27（1413―1312）25 中国

得	【日本】		【中国】	得
0	福井	GK	謝継勇	0
0	井藤	GK	周森林	0
2	津川	FP	陳志軍	3
1	穂積	FP	呉明祥	4
8	山本	FP	李太平	7
8	蒲生	FP	張新安	1
0	池ノ上	FP	王 雄	6
0	斉藤幸	FP	金百煉	1
6	関	FP	宋安文	0
0	斉藤将	FP	夏 抑	1
0	中本	FP	李英才	1
2	大原	FP	張 生	1
27（3）		PT		（3）25

○…「中国のオリンピック予選参加」が色濃いものとなり、選手たちは、燃えた。

1分山本、3分関が決めて幸先よいスタート、16分には8―5、20分10―7とリードを奪った。

しかし、一万をこす地元ファンの声援をうける中国は、強引なカットインから追撃をみせはじめ、李、王らで28分30秒11―11となった。

日本は、すぐ蒲生が射ち返し12―11としたが、中国も29分20秒王のポストで粘りつく。

ラストチャンスをつかんだ日本は、29分55秒、関がサイドの難位置から鮮やかに決め、1点差で折り返す。

○…後半、日本ベンチは、この大会、温存してきた大原を起用、スピーディなリズムで、中国守備陣を割る策戦を採った。

この策は当り、好テンポの日本オフェンスは、40秒山本、2分蒲生、4分関とたたみかけ、7分には大原がシャープな動きで19―13とした。

ここで、穂積が反則退場を課せられたが、津川がディフェンスをよく締め、逆に12分速攻から関が決めて7点差(22―15)、大勢を決めたかにみえた。

ところが、とどめともいうべきあと1点を凡ミスから逃しているうちに、中国の逆速攻やPTを受け、呉、王、李、陳らのたたみかけを許し、21分23―21と急迫された。

このあたりは、さすがに中国も強くなっているし、日本としては大きな反省を残す〝甘さ〟でもあった。

○…気をとりなおした日本は22分、23分蒲生の連続ゴールで態勢が立ち直り、25分津川、26分山本で27―23、今度こそ勝負を決めた。

中国は、それでもなお、追いかけ27分王、28分張で25―27としたが、日本は、余裕を残して、タイムアップの笛を聞いた。（東）

〝五輪予選には新しい策で〟

全日本男子監督　竹野　奉昭

第1戦の直前、団長（荒川理事長）から「中国のオリンピック予選参加濃厚」を聞いたので、若干の緊張はあったが、まずまず、楽なペースでの優勝といえた。

やはり、最大の焦点は中国で、2年前（第1回アジア選手権、3位）の時より、ヨーロッパとの交流もあり、プレーが「ハンドボール」になってきている。

体格は、FPでは陳の192㎝が最高で、呉、李、張らが190㎝台と大きい。

しかし、防禦などでのスピードに欠けるし、負ける気はしない。

問題は、今回のメンバーが、はたして〝レギュラーか〟ということだろう。

上海選抜との試合などから推しても、まだまだ、トップクラスの選手は居るような気がする。

オリンピック予選で、日中再戦となれば、我々も、新しい策で臨む必要があると思う。

このほかの国では、クウェートが強くなっている。ハンガリーの元五輪代表アドリアン氏がコーチだが、中国戦の2点差など立派なもの。

期待した朝鮮民主々義人民共和国が現われず、参加国が、意外にも、前回（9カ国）を下廻ったのは淋しかったが、アジア地域のハンドボール熱は、はっきりと燃えあがっている。

今のところ、各国の目標は日本におかれ、日本にも余裕はあるがいつまでも、楽に勝てると思ったら、間違いだろう。

中国やクウェートの進歩をみていると、やがては、アジアを制することが、世界のベストエイトに入ることにイコールの時代も来そうだ。

そのために、日本は、アジアでの覇権を大きな目標とし、強化分野に、ヨーロッパ対策とアジア対策を並列させることが急務である。

我々は、これから、台湾でのアジア予選に乗りこむが、少なくとも、今回の選手権のスコアを下廻るような試合はしたくない。

選手たちも、金メダルをうけて〝アジア・チャンピオン〟としての誇りと自信がついたハズだ。

その上で、再び中国と相まみえはっきりと実力のあるところを示すつもりでいる。

なお、中国の女子は、上海地域で、重点的に行われているとのことであった。（11月13日東京で）

クウェート、中国に1点差

◆このほかの試合

クウェート 41（2120―77）14 インド

中国 33（1815―79）16 パレスチナ

中国 22（1111―119）20 クウェート

パレスチナ 27（1215―1211）23 インド

中国 52（2527―64）10 インド

クウェート 30（1416―86）14 パレスチナ

【順位】①日本4戦全勝②中国3勝1敗③クウェート2勝2敗④パレスチナ1勝3敗⑤インド4敗

北朝鮮は姿見せず

○…注目の朝鮮民主々義人民共和国（北朝鮮）は、姿を見せなかった。

パキスタンらが、代表者(役員)を送り、開会式だけ参加したにもかかわらず、北朝鮮は、それさえもなく、対戦を心待ちにしていた日本勢を、がっかりさせた。

また、韓国は、大会前から日本協会がつかんでいたように、この大会には招かれなかったようだ。

上海選抜と親善試合

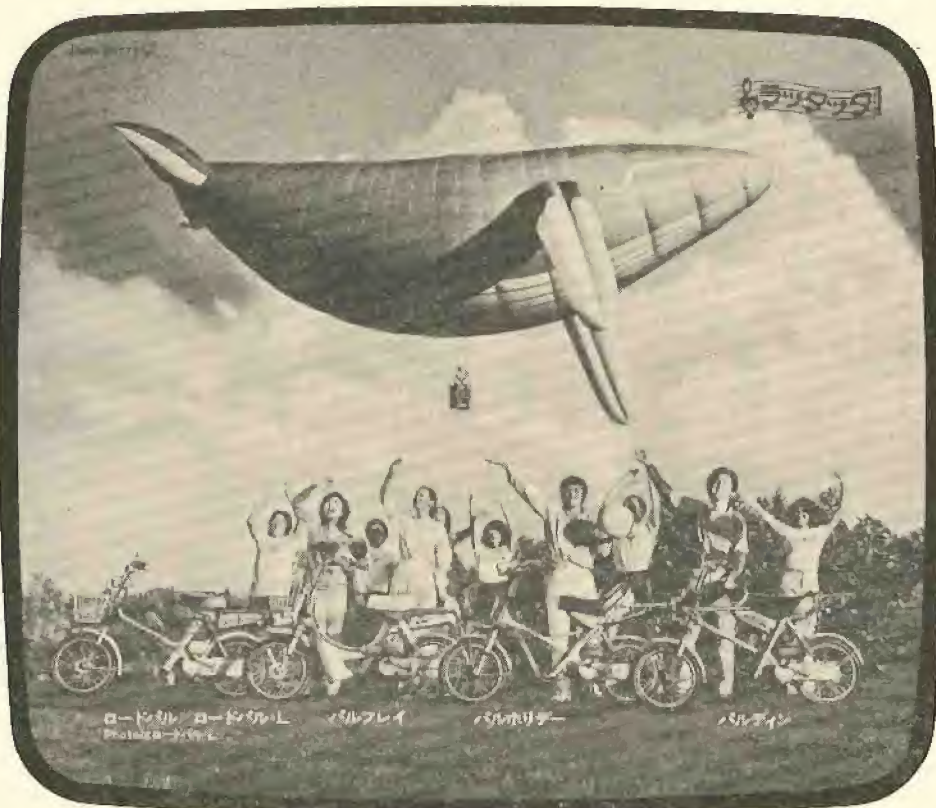
大会を終えたあと、日本は、上海へ転戦、地元選抜チームと親善試合を行った。

▽親善試合（11月11日19時・上海市体育館）

日本 25（1411―138）21 上海選抜

得	【日本】		【上海】	得
0	井藤	GK	刘 翔	0
0	岡部	GK	黄建民	0
1	津川	FP	姜栄根	9
0	山本	FP	濤駿杰	0
4	池ノ上	FP	張宏林	0
8	生駒	FP	張国栄	2
2	蒲生	FP	韓乃国	0
1	中本	FP	李慕迎	2
3	斉藤将	FP	王立順	0
1	斉藤幸	FP	蔡忠平	2
1	志賀	FP	江山明	6
4	穂積	FP	張祖安	0
25（3）		PT		（2）21

パルパル エブリボディ。



5タイプそろったホンダのパルシリーズ。乗りやすさは共通。お好きなタイプが選べます。

ロードパルの仲間たちが、たくさん走りはじめています。あの道、この道が、急にバラエティ豊かになりました。スタイルいろいろ。色とりどり。乗る人の個性と、パルの個性が…なぜかぴったり合うのです。5タイプそろったパルのうち、あなたのお気に入りはどれですか。もちろん、やさしさ・乗りやすさは、みんなおなじ。気軽にどこかへ散歩、としゃれてみたくなります。

パルはユニーク。新しい仲間も、個性たっぷり。●パルフレイ：エレガントなデザイン。乗り降りのラクなU字フレーム(車体中央)。泥ハネから足もとを守るレッグシールドなど親切設計が特長。●パルホリデー：ユニークなヒップアップ・シート。しゃれた感覚のバーハンドル。タウンで似合うバイクです。●パルディン：スリムなパイプフレーム、イキなクロームメッキ・フェンダーがナウな感じ。

ごぞんじですね、ラッタッタ。**ロードパル**	標準現金価格 ¥59,800
クイックスタート、とってもべんり。**ロードパル・L**	標準現金価格 ¥64,800
乗るかたへの心くばりがいっぱい。**パルフレイ**	標準現金価格 ¥75,000
しゃれたスタイル、タウンで似合う。**パルホリデー**	標準現金価格 ¥79,000
ヤングの感覚、ナウなフィーリング。**パルディン**	標準現金価格 ¥79,000

ヘルメットをかぶろう HONDA

「私のパル」を持ちましょう。

パルスクール 原付免許の取り方だけでなく、正しい乗り方指導までも実施しているのが「パル・スクール」の大きな特長。ていねいにご指導しています。

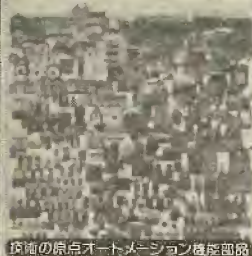
ホンダクレジット わずかな頭金とかんたんな手続きでお求めいただけます。お支払い方法は、ご予算にあわせていろいろ。クレジットカードはいりません。

★パルスクールとクレジットの詳細は、ホンダ販売店でどうぞ。

本田技研工業株式会社鈴鹿製作所
●〒513●三重県鈴鹿市平田町1907●TEL鈴鹿0593：78－1212(代表)

テーマは「人間と機械」

「機械にできることは機械にまかせ、人間はより創造的な分野での活動を楽しむべきである」……これが立石電機のモットーです。


技術の原点オートメーション機能部品


産業用無人化システム


都市の交通制御システム


鉄道の駅務自動化システム


銀行の窓口省力化システム


ガソリンスタンドのPOSシステム


オフィスのコンピューター・システム


小売店頭の電子レジスター



立石電機

立石電機株式会社／本社
〒616 京都市右京区花園土堂町10
TEL 075(463)1161大代

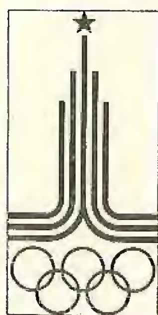
日本が生んだ世界のボール

タチカラシームレスボール

日本ハンドボール協会検定球



東京・メキシコ・モントリオール・モスクワと、いつのオリンピック大会でもバレー、バスケット等、世界で唯一社の公式試合球に指定されているタチカラの輝かしい実績は、世界に誇る日本のボールメーカーです。
ハンドボールの歴史と共に縫ボールの時代からボール一筋に手がけて来たタチカラのハンドボールは一味違う中空製法です。(チューブが離てる)


JOC-MS-4-77-3



タチカラ株式会社

営業所　東京・大阪・名古屋・福岡・札幌

日本協会専門委員会だより

総務

＜アジア選手権＞11月17日からのオリンピック・アジア予選（台湾）男子の勝者と中国が日本でアジア代表決定戦を行なう、と国際ハンドボール連盟（IHF）が決定してから一層アジアハンドボール選手権大会における日本―中国戦の結果が気になっていたので、11月8日夜、日本時間では9日午前1時東コーチから日本辛勝の電話報告をうけたときはほっと胸をなでおろしたものです。

日本が来たるべき中国とのアジア代表決定戦のために秘密兵器を温存したということはあっても、前回以来の中国のめざましい飛躍は、これからの日本のよきライバルとなるでしょう。

今回の大会運営については参加国が五カ国しかなかったこと、そのために当初の日程を三日も短縮したにも拘らず事前に組合せや日程変更などを参加国に知らせなかったこと、審判技術の低劣さなど、数々の問題点があったが、これは主催国はもとよりAHF IHFの管理のずさんに基づくものでしょう。

＜アジア代表決定戦＞上記のとおり、台湾におけるモスクワオリンピック・アジア予選の勝者と中国が日本でアジア代表決定戦を行なうことになりました。

これは、アジアハンドボール選手権大会のため中国を訪れていたIHF会長が決定したものであるが、日本選手団の荒川団長の説明によると、中国ハンドボール協会のIHF仮加盟とモスクワオリンピックへの参加資格（11月26日のIOC委員会の中国承認が条件）はキラニンIOC会長から要請によってIHFが決定したものであり、IHFは従前から中国問題はIOCの決定にならうという態度をとっていた経緯から当然のこととしても、既定のアジア予選日程の中に組み込まず、その勝者と中国とを対戦させてその勝者をアジア代表としてオリンピックに参加させるということは、中国・台湾といういわば中国側の事情により中国に絶対有利な地位を与えるわけで、高度に政治的な決定とはいえ割り切れないものがあります。

とにもかくにも、台湾で日本が優勝して帰ってきたのですから、このアジア代表決定戦は実力で中国を圧倒してモスクワ行きの切符を手にしたいものです。

（大野金一）

財務

目下55年度予算案作成に大わらわというところ。

協会で毎年決って入る収入は、加盟金、登録金、検定審査料の約一七〇〇万円で、これは協会運営費に充当すると、ほぼ満杯で、他の活動費に充てる予算は見当らないという心細さである。男女共、オリンピックに出場可能とされる協会としては、なんとも歯がゆい台所である。

そんなところへ、男子も、オリンピックアジア予選台湾大会で、すんなり決定すると思いきや、IOCの中国承認により、日本ハンドボール協会は大騒動。アジア予選の勝者と日本で代表決定戦を行うとのこと。日本が勝つとは誰も信じたいが、もし負けるようなことがあれば大変なことだ。

上記の大きな大会への遠征経費は莫大なもので、繰越金、補助金のほぼ全てを使い果たし、次年度の繰越金を期待出来そうな状態ではない。そこへもってきて、日本でのオリンピック代表決定戦日中大会（台湾での勝利を見越して）には、約六〇〇万円の経費が必要となる。

突然の開催だけに準備もままならず、マスコミ対策、観客動員に苦慮することしきり。

しかし男子にしろ、女子にしろオリンピック出場が何にもまして最大の武器、理屈抜きに、モスクワへの切符を手に入れてほしい。それがハンドボール普及への大きな手がかりなのだから。

十二月初めに行われる日中大会は、観客動員に全力をあげたい。マスコミの協力も大いに期待したい。

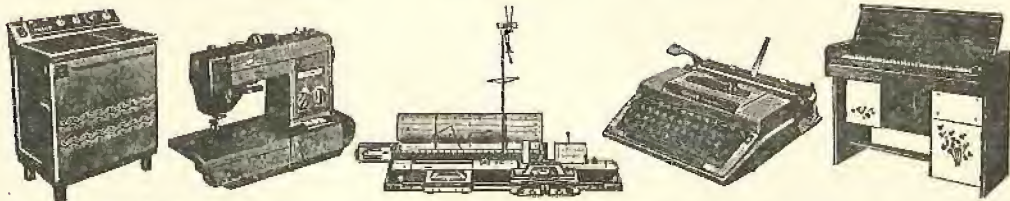
ハンドボール協会は、もっと商売をしなければいけないと思う。財源を探してみるとそこにしか活路はない。興行をうって観客を動員し、入場料収入をはかること。プロではないけれど繁栄への道はそれしかない。普及の任務は重大であり、協会あげてそれにあたらねばならないと思う。

困ったときに地方協会へ、協力金を仰ぐということのない様に。

日本リーグ加盟の各企業にとってもハンドボール人気は、企業PRにつながり、メリットは大きいはず。ハンドボール普及の果たす役割は、とても大きいのである。

▼アジア代表決定戦入場料（12月7日・名古屋大会）一般千八百円、高校生千二百円、中・小学生七百円。（9日・東京大会）一般二千円、高校生千円、中・小学生五百円





12日から全日本総合選手権（東京体育館）

今年の総決算・第31回全日本総合選手権は、12月12日から16日まで東京体育館に、例年どおり、男子24、女子16のトップチームを集め、トーナメント法式によって行われる。

すでに組み合せは決まっているが、全日本学生選手権の終了が12月2日のため、男女ともチーム名が完全に埋まり切っていない。強引ながら、タイトルの行方を探ってみよう。

大同×湧永か大同×本田か

◆男子　ベストエイトに勝ち残るのは、大同、イーグルス、日新、本田技、湧永の日本リーグ勢と学連第1、第2推せん校、それに三陽×スワロー兵庫の勝者だろう。

このうち、大同、本田技の準決勝進出は固いとみていい。

注目すべきは、湧永×学連第1推せんと、イーグルス×日新戦だ。学生界にくわしい人たちの話では、相変らず学生のレベルは上っていないという。

とすれば、湧永楽勝を占えるが、もし、第1推せんが、日体大になると、もつれる可能性は出てくる。

日体大は、学生界で、いまや唯一といってよいほど、この大会のタイトルに執念を燃やして挑んでくるチームだからだ。

イーグルス×日新は、日本リーグ後期の試合ぶりからすれば、文句なく日新。巧者のイーグルスが一本勝負ということで、どう出てくるか興味深い。

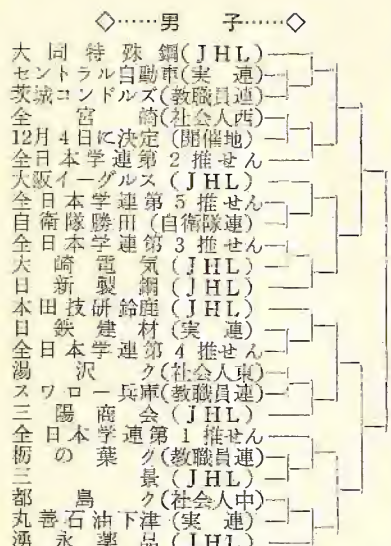
ここで、話を一つとばすと、順当なら決勝は5年連続・大同×湧永になりそうだ。

湧永は日体大のあと、本田技戦が大きなヤマ。

湧永の主力に、アジア選手権、オリンピック予選の疲れが残っているようだと、本田技のパワーが爆発を誘いそう。

苦しいながら、湧永が、ここを乗り切っての大同戦なら五分と五分。大同はリーグ、国体、全日本実業団につづくタイトルを狙って6年ぶり2度目の「四冠王」といきたかろうが、湧永の闘志を期待したい。

大同×本田技戦なら、大同に五・五から六分の利がある。



（注）男子決勝は16日14時からNHK教育テレビで全国中継



ダークホースには三陽商会をあげておく。

主力選手の立ち直りがカギ

◆女子　オリンピック出場の夢を絶たれた直後だけに、なんとも予想がたてにくい。

一応、日本リーグ勢、それもビクター、ブラザー、ジャスコ、日立×立石の勝者が、4強となろうが、立石を除いては、いずれも主力が、精神的にまいっている。

予選後の2週間で、どこまで彼女たちが、立ち直っているかをカギとみてよい。

痛手が深いようだと、北国、重機、学連上位2校あたりの進出も考えられ、波乱含みとなる。

こうしたハンデを一切抜きにして見通せば、ビクター×ブラザー・ジャスコの勝者の決勝だろう。油断ならないのは日立と立石。

なお、組み合わせ委員会（11月8日）では、過去、前年の優勝チームを据えた"1番"の座を、今年はオープンにして、組み合せを決めている。

別段、それで不都合というわけではないが、この大会をチャンピオンシップと権威づけるなら、このナンバーは、やはり、前年のクイーンとすべきだし、さもなくば日本リーグ1位を持ってくるほうが、感じがいいのではないか。

22、23日に日本リーグ入替戦

日本リーグ運営委員会は、今年度1、2部入れ替え戦（2回戦制）の日程を次のように発表した。会場は大阪市中央体育館。

▽第1日（12月22日）13時(女)大和銀行×東京重機、14時15分三陽会×大崎電気、15時10分(女)北国銀行×ムネカタ、16時50分大阪イーグルス×三景。

▽第2日（12月23日）10時(女)北国×ムネカタ、11時15分イーグルス×三景、12時10分(女)大和×重機、13時50分三陽×大崎。

『ハンドボール』

54年12月号（第180号）目次

【表紙写真】オリンピックアジア予選男子・日本×韓国2回戦日本・穂積の攻撃。（スポーツイベント提供）

●デサントハンドボールウェアは日本ナショナルチーム(男女)、日本リーグ(男女)、大学選抜(男女)で採用されています。

勝ちぬく速攻メカ。

凄い奴がでた。その名は「ザ・スタジアム ハンドボールウェア」。「アクションカット」「Jカット」という新機能を搭載。腕の動きをケタ違いに高め、速攻機能を大きく広げた。まさに、ハンドボールのための新兵器。ボールをゴールにたたきこむ、とっておきのメカだ。世界選手権をはじめヒノキ舞台で活躍する、デサントのノウハウがいま、コートで冴える。

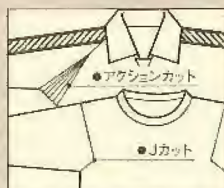


写真:DSS-201 衿付長袖シャツ(肩アクションライン) ¥3,400●スクラムニット●ポリエステル50%・綿50%●S・M・L・O STUDIUMはデサントの登録商標です。

THE STADIUM®

DESCENTE

《本格派》デサント・ハンドボールウェア/ザ・スタジアム



1980 MOSCOW デサントはモスクワ五輪に協力しています。

発売元/株式会社デサント

第2回世界男子ジュニア選手権記録

―初参加の日本19位―

第2回世界男子ジュニア選手権は、10月23日から11月4日まで、デンマークとスウェーデン両国にまたがる会場で23カ国のホープたちによる熱戦を展開、初参加の日本は19位となった。優勝はソ連（2連勝）。シニアが世界一の西ドイツが11位に終るなど波乱含みだった。

◆予選リーグ▽B組

ハンガリー 37（19―12、18―10）22 日本

	【日本】	得
GK	山下（京都産大）	0
GK	簔輪（名城大）	0
FP	仲田（日大）	3
FP	西山（筑波大）	6
FP	猪野（中大）	3
FP	内田（湧永薬品）	1
FP	高木（日新製鋼）	1
FP	寺山（日体大）	2
FP	田口（中大）	5
FP	尾上（中大）	0
FP	田野（京都産大）	1
FP	金井（大崎電気）	0
PT	（1）	22

デンマーク 37（18―7、19―6）13 日本

	【日本】	得
GK	山下	0
GK	簔輪	0
FP	仲田	0
FP	西山	3
FP	田口	1
FP	猪野	1
FP	内田	3
FP	寺山	0
FP	尾上	3
FP	金井	0
FP	田野	2
FP	高木	0
PT	（0）	13

日本 22（9―8、13―11）19 ルクセンブルグ

	【日本】	得
GK	山下	0
GK	簔輪	0
FP	仲田	4
FP	西山	11
FP	田口	1
FP	猪野	3
FP	尾上	2
FP	金井	0
FP	内田	1
FP	高木	0
FP	三浦	0
FP	寺山	0
PT	（2）	22

フィンランド 29（13―9、16―10）19 日本

	【日本】	得
GK	山下	0
GK	小野	0
FP	猪野	6
FP	尾上	0
FP	西山	5
FP	仲田	2
FP	内田	1
FP	高木	2
FP	寺山	0
FP	田野	0
FP	金井	0
FP	田口	3
PT	（1）	19

フランス 24（11―11、13―8）19 日本

	【日本】	得
GK	簔輪	0
GK	山下	0
FP	尾上	1
FP	猪野	3
FP	内田	1
FP	田口	0
FP	西山	9
FP	仲田	2
FP	金井	0
FP	田野	2
FP	三浦	0
FP	若杉	1
PT	（5）	19

デンマーク 20―13 フィンランド
フランス 23―11 ルクセンブルグ
ハンガリー 37―15 ルクセンブルグ
フランス 32―16 フィンランド
ハンガリー 23―17 フィンランド
デンマーク 29―21 フランス
ハンガリー 26―20 フランス
デンマーク 30―11 ルクセンブルグ
デンマーク 19―11 ハンガリー
フィンランド 32―23 ルクセンブルグ

【順位】①デンマーク5戦全勝②ハンガリー4勝1敗③フランス③フィンランド2勝3敗⑤日本1勝4敗⑥ルクセンブルグ5敗

▽同A組

ユーゴ 25―13 ノルウェー
ポーランド 50―18 台湾
東ドイツ 25―16 イタリア
東ドイツ 52―13 台湾
ポーランド 20―17 ノルウェー
ユーゴ 26―11 イタリア
ノルウェー 20―16 イタリア

東ドイツ 21―20 ポーランド
ユーゴ 44―14 台湾
ポーランド 24―20 イタリア
ノルウェー 45―18 台湾
ユーゴ 21―15 東ドイツ
イタリア 39―14 台湾
東ドイツ 31―16 ノルウェー
ユーゴ 25―18 ポーランド

【順位】①ユーゴ5戦全勝②東ドイツ4勝1敗③ポーランド3勝2敗④ノルウェー2勝3敗⑤イタリア1勝4敗⑥台湾5敗

▽同C組
西ドイツ 25―8 サウジアラビア
アイスランド 25―19 ポルトガル
ソ連 29―13 オランダ
西ドイツ 20―9 オランダ
ポルトガル 17―16 サウジアラビア
ソ連 25―20 アイスランド
西ドイツ 25―10 ポルトガル
アイスランド 25―17 オランダ
ソ連 33―9 サウジアラビア
アイスランド 16―14 西ドイツ
オランダ 17―16 サウジアラビア
ソ連 40―17 ポルトガル
アイスランド 35―13 サウジアラビア
オランダ 17―13 ポルトガル
ソ連 28―18 西ドイツ

【順位】①ソ連5戦全勝②アイスランド4勝1敗③西ドイツ3勝2敗④オランダ2勝3敗⑤ポルトガル1勝4敗⑥サウジアラビア5敗

▽同D組（5カ国）
チェコ 32―16 イスラエル
スイス 21―10 ベルギー
チェコ 22―13 ベルギー
スウェーデン 29―19 イスラエル
イスラエル 24―19 ベルギー
スウェーデン 21―14 スイス
チェコ 29―10 スイス
スウェーデン 22―12 ベルギー
スウェーデン 24―21 チェコ
スイス 21―16 イスラエル

【順位】①スウェーデン4戦全勝②チェコ3勝1敗③スイス2勝2敗④イスラエル1勝3敗⑤ベルギー4敗

◆17～23位決定戦予備ラウンドB組

日本 21（8―9、13―9）18 サウジアラビア

【日本】		得
GK	簑輪	0
GK	山下	0
FP	仲田	3
FP	猪野	2
FP	田口	0
FP	西山	6
FP	内田	1
FP	寺山	0
FP	若杉	4
FP	金井	0
FP	高木	3
FP	尾上	2
PT	（1）	21

ポルトガル 27（11―10、16―12）22 日本

【日本】		得
GK	簑輪	0
GK	山下	0
FP	仲田	7
FP	西山	7
FP	田口	2
FP	猪野	3
FP	尾上	2
FP	内田	1
FP	金井	0
FP	高木	0
FP	三浦	0
FP	若杉	0
PT	（1）	22

ポルトガル 22―20 ルクセンブルグ
サウジアラビア 22―18 ルクセンブルグ

▽同A組（3カ国）
ベルギー 36―19 台湾
イタリア 15（分）15 ベルギー

◆準決勝リーグA組
ユーゴ 17―15 チェコ
スウェーデン 18―17 東ドイツ
ユーゴ 23―17 スウェーデン
東ドイツ 22（分）22 チェコ

▽同B組
デンマーク 22―16 アイスランド
ソ連 26―17 ハンガリー
ソ連 27―21 デンマーク
ハンガリー 17―14 アイスランド

◆9～16位決定戦予備ラウンドA組
ポーランド 25―21 イスラエル
ノルウェー 29―16 スイス
イスラエル 20―19 ノルウェー
ポーランド 21（分）21 スイス

▽同B組
フランス 22―16 オランダ
西ドイツ 29―13 フィンランド
フィンランド 19（分）19 オランダ
フランス 24―22 西ドイツ

◆順位決定戦▽19～20位決定戦

日本 20（10―7、10―12）19 ベルギー

【日本】		得
GK	簑輪	0
GK	小野	0
FP	仲田	3
FP	西山	9
FP	田口	2
FP	猪野	3
FP	尾上	2
FP	内田	0
FP	金井	0
FP	高木	0
FP	寺山	1
FP	若杉	0
PT	（1）	20

▽優勝決定戦
ソ連 30（16―12、14―13）25 ユーゴ

▽3～4位決定戦
スウェーデン 25（13―13、12―7）20 デンマーク

▽5～6位決定戦
チェコ 20（8―7、12―12）19 ハンガリー

▽7～8位決定戦
アイスランド 27（17―14、10―10）24 東ドイツ

▽9～10位決定戦
フランス 27―23 ポーランド

▽11～12位決定戦
西ドイツ 20―18 スイス

▽13～14位決定戦
ノルウェー 22―20 オランダ

▽15～16位決定戦
イスラエル 30―27 フィンランド

▽17～18位決定戦
イタリア 26―20 ポルトガル

▽21～22位決定戦
台湾 23―22 サウジアラビア

◆親善試合（10月18、20日西ドイツ2試合）
日本 31（15―11、16―8）19 TV・ハッシュハイド
日本 32（15―16、17―12）28 MTV・ヘンスタッド

頑張った高校両選手

木野実・全日本ジュニア監督の話

予選リーグで2～3勝と踏んでいたが、この見通しは甘かった各国とも、シニア（ナショナル）なみの強化をつんでおり、ジュニアとしての公式国際試合経験が20回をこす選手も、各国に1人や2人はいる。

そのなかで、海外遠征さえ初経験という選手が大半の日本は、むしろ、よくやったというべきかもしれない。

特に、久留米工大付属高の若杉と小野（GK）両君が、素直なプレーで、力いっぱい戦ったことは〝嬉しい収獲〟であった。

今後の世界は、ジュニアーシニアの一貫強化体制が確立された国が主流となることは間違いない。日本も、早急に、この面での整備を行なう必要があろう。

選手の選抜も、〝大型〟主体でよいか、検討の余地がある。

西山、個人得点で3位

大会本部は、全試合終了後、個人得点ベストテンを発表したが、56ゴールをあげた日本の西山（筑波大）は、3位にランクされた。

1位は、60ゴールのカルシヤケビッチ（ソ連）とロンベルグ（フィンランド）の2人。

また、反則退場時間数の少ない国に与えられる「フェア・プレーカップ」は26分（2分退場13回）のルクセンブルグに与えられ、30分の日本は、2位となった。

優勝国のソ連は66分で20位、準優勝のユーゴは86分で23位（最下位）。この数字は、何を物語っているのだろうか。

世界男子ジュニア選手権に参加して
～男子選手寄稿(上)～

日体大　寺山敦雄

まず、ぼくが一番おどろいたのは、サイドラインのほとんどぎりぎりまで、プレーに邪魔になるのではないかと思われるほど側まで観客が入って声援してくれるのです。ほんとうに観客と選手の間が日本とはちがって、とても狭く感じるのです。ナイスプレーでもすれば、会場が割れんばかりの声を張り上げ応援してくれるのです。

日本と、ちょっとちがうのは会場まで相手チームの選手といっしょのバスで行きました。近い所で数km位、遠くなると、バスで一時間以上もかかり、最初のころは、試合が夜ということもあって、バス移動のとき眠くなりました。本田さんやその他の気づいた人どうしで眠らないようにしあいました

試合前のアップというのも、日本のように、ハーフタイムで次の試合のチームが、コートに出て練習というのはありません。

各チームでアップの場所を見つけて、走ったり、パスしたりして体を作るのです。試合前、10分間だけ、コート上で練習が出来ました。先輩などから話しには聞いていましたが、やってみるとわかりますが、狭い所でアップするので短い時間でも、多く運動したような錯覚を感じるのです。それでゲームに望むと、前半の前半から、相手ペースで試合を運ばれて、落したようなゲームも何試合かあったような気がします。

外国選手は手が大きいにもかかわらず、ぼくの想像していたより小回りや、動きも早く、そのうえ手や体の大きいのをうまく利用してくる選手が多かった。

しかしキーパーに関しては日本も、外国も、同じだと思う。

とてもすばらしいと思ったのは2m近く身長があって、体重も90kg以上あるような、サイド、ポストプレーヤーが、平気な顔をしてどンどン倒れ込んでいくのにはとても驚きました。

あと大きく、日本チームと外国チームの違いは、得点のあとの喜び方が、日本チームは相手チームに比べて少なく、また小さいと思いました。それによって、今までとは雰囲気を変え、悪い雰囲気はよく、またよいムードは、より一層のよいムードを作るのにとても大切だと思う。

今回の遠征で、ぼくはいろいろなことを学び、身に付けました。あとは、それをどこで生かすかは、自分次第だと思います。

ぜひがんばりたいと思います。

日体大　高村誠一

メンバー全員が集って練習するという事がほんの少ししかなくてコンビ練習もほとんどないまま世界選手権に臨んだ日本チームだった。日本ではメンバー全員が集まる事が難しかったので、外国チームも日本と同じ程度しか練習していないだろうと思っていた。

第一戦目の対ハンガリー戦では前半10分までは両チームとも相手チームの事がわからなかったのでシーソーゲームとなったが、時間が過つにつれてだんだん力の差が出てきた。外国チームとはどこかで差があった。訓練のされ方が違っているのだと僕は思った。特にソ連などは単独チームで来ている様に思えるくらい、チームがよくまとまっていた。かなり訓練されているなと感じた。

日本も、もっと合宿などをたくさん行い声を出さなくてもディフェンスのコンビがとれるくらいになっていたら、もっと良いところまでいっていたと思う。

初めて外国チームと試合をし特に感じた事は、外人は体があるという事だ。上背も横もありディフェンスをしている時などは一枚の壁であり、オフェンスで走り込んでくる姿はまるで猪である。いくら日本が前で当っていても、そのままひきづられてシュートをうたれた事がたくさんあった。あれだけの体があってその上スピードがあるとなると、もう攻め入るスキがない。体の小さな日本にとっては致命的だった。

今世界のハンドボールはとてもスピーディになってきている。速攻をもっていないチームは、ほとんどなかった。いくら体が大きくてもゆったりしたチームでは、もう世界では通用しない。外国の大男達が速攻を使うようになったら体の小さな日本はそれ以上のスピードで攻めなければならない。

とにかく今回の遠征で一番驚いた事は、外国選手の大きさ、力強さ、スピードの三点だった。190cm・90kgの大男があれだけのスピードで動けるという事にとても驚いた僕は今まで自分は大型選手だから少しぐらいスピードがなくても何とかシュートがろてるだろうと思っていたが、今大会で僕より大きい選手がすごいスピードでプレーしているのを見て考えを改めた。

僕ぐらいの身長だったら、もう少し体重を増やしスピードをアップしないと、国内でも通用しなくなるからこれからは体作りとスピードアップを心がけて一生懸命頑張っていきたい。

最後に、僕は外国チームのすごいところばかりを見て驚いたが、外国チームにもまだまだこれからというところがあるはずだし、外国チームが日本を見てすばらしいチームだと思ったかもしれない。僕達はまだまだこれからなんだから、将来又顔を合わせた時には必ず勝てるように頑張っていこう。

名城大　蓑輪正雄

僕にとって今回の遠征は生まれてこのかた最高の経験になったと思います。ハンドボール面はもちろん生活面・人間関係面など共に視野が一変したように思えます。特にハンドボールに関しては世界の壁の厚さに今さら感心するばかりです。

というのはデンマーク・西ドイツでは小さな子供の頃からハンドボールに関心を持ちハンドボールをしたり試合を観戦したり選手にサインを頼んだりしているからです。また自分たちと同年代の人達

は恵まれた体格に練習のたまものがプラスして力を主体としたケタはずれのハンドボールをするのです。とても同年代とは思えないほどでした。そしてまたその他ほかの人達も若い人達に負けないぐらい熱心にハンドボールを観戦していたからです。こんなに広く奥の深いスポーツであるとは思ってもいませんでした。恥かしいことに僕は外国にきて日本と同じハンドボールのゴールがあったことを最初は信じられなかったほどでしたから。

それからまた決勝戦を観戦しました。ブロンドバイの大きな体育館は割れんばかりの大観衆で、その中で選手たちは今まで練習してきたものを思いっきりだしきっている感じで試合が終わり、互いに握手し抱きあう姿に感動しました僕もはやくあんな応援の中で、すばらしいプレーをすることを目標に毎日がんばりたいと思いました。

また寮生活ではない自分には集団生活の厳しさが今まで以上によくわかりました。場が大きければ大きいほど、また責任が重ければ重いほどそれはむずかしくなるのです。一人一人が緊張して生活しあいチームワークを大切にしなければいけないと思いました。ましてその仲間で君が代を唱い、日の丸をかかげ国をあげての戦いだから一層それを固めなければいけないし、それをおこたればチーム一丸となって戦えないと思いました一人一人が自分自身を皆の前で、さらけ出し仲間でしかできない新しいものを創りだしていかなければならないと思いました。そしてまたそれがチームプレーのよさだと思いました。今回の遠征でそれが痛いほどよくわかりました。

終わりに今までで最高の勉強をさせていただき遠征に協力してくださった多くの人に、誌上ではありますが感謝したいと思います。

京都産大　田野好晃

今、世界ジュニア大会を、振り返ってみると、自分が日本を、立つ時に決意した事が、思いどうり実行できたかということが、真先に、頭にうかんだ。大会に入る前には、自己の持っている力を、全部出し、思いきってやれば、良い結果がでると思っていた。でも、いざ、この大会に、はいってみると、それすらできない状態だった試合には、あがりはしなかったがスタメンではなかったので、アップしてから10分〜20分たってから試合に望むといった状態だったので、すぐに、チームの中にとけこめなかったし、自分の体のコンディションをベストに、もっていけなかったということが、いま考えても、悔やまれて、しかたがないことだ。それに、試合にのぞむ姿勢がわるかったと思う。というのは、やはり、今日の試合では、ベンチ入りできるか、ということが先だち、ベンチ入りできなくて、負けると、悔やまれて、悔やまれてしかたがなかった。

フランスにしても、フィンランドにしても、ポルトガルにしても充分日本チームが、勝たなければならないチームだと思います。それを、凡ミスで、自滅してしまって、日本チームの良さと言うか、特徴である、すばやい動きと速攻が、見られないまま、終わってしまった事が、残念でなりません。

やはり、凡ミスのすくないチームは、勝っているし、良い試合をやっていると思います。決勝のソ連とユーゴスラビアの試合を見てもわかるように、まったくといっていいほど、凡ミスがなく、それで、あたり前だと思う。ソ連やユーゴスラビアの選手は体格も違うし、パワーも違うが、同じ年の者がやっているのだから、自分にもできないことはないと思う。

でも、この大会に出場できて、本当に勉強になったと思う。

いくら、オフェンスで、がんばっても、ディフェンスが、悪ければたぶん、その試合は、負けるだろう。ディフェンスが、強ければ強いほど、そのチームに対する評価が大きいと思う。

それに、この大会の試合を、見ていて、ソ連にしても、ユーゴスラビアにしても、サイドシュートが多く、サイドから、ディフェンスをくずしていっていると思う。その点、日本チームは、サイドシュートが、少なく、攻撃が、中央に集ってしまい、ディフェンスの厚いところで、勝負している。

でも、本当に、世界ジュニア大会に、出場でき、自分なりに、良い点を、得られたので、たいへんよかったと思います。

京都産大　山下直樹

今大会に於いて私は、世界のハンドボールが、こんなにもスピーディーな物なのか、そして、日本で私達が行っているようなプレーでは、とても及ばないのではないか、と考えてしまいました。

私は、この試合が初めての国際試合と言うことで、最初は、試合会場の雰囲気や観客の多いことなどでプレッシャーがかかった見たいだったので思うようにプレー出来なかったようだったが、一本ずつシュートを取るにつれて、自分のプレーが少しずつ出て来たようだった。でも、実際、試合が始まれば無我夢中と言うか、ほんとに何も考えていなかったようでしたこれは、自分だけではなくチームの者みんなが、試合が終ってから

こう考えているのではないだろうか。

ところで、日本は、この世界ジュニア大会に参加するのは今度が初めてで、他の国のジュニアチームが、いったいどのようなプレーをするのか、まったくわからなかったが、一つだけわかっていた事は、私達と同じ年代の者がプレーすると言うことだけだ。しかし、そう思わなければ、あまりにも体格の差があるので、みんな自信をなくしそうだったからではないでしょうか。ところが、他のチームのプレーを見ていれば、これがほんとに私達と同じ年かと思わせるような、すごいプレーをするし、日本チームのようなミスは、あまりやらないので、ほんとに驚きました。

実際、日本チームは、ミスの連発で、勝てる試合も自分達のミスが多いために不利になって負けてしまった、と、いう試合も幾つかあったように思いました。と言うのも、やはり基礎であるパスとキャッチが完全でないということやコンビが合っていない、ということ、それにボールに対する執念が足りなかった、ということなど、考えて見れば、随分、他のチームに比べれば劣っていたようだし、もう一つ外人の体の大きさに圧倒されていたのではないだろうか。自分自身最初のうちは、いざ試合になれば、よし、やってやろうという気迫が表に出ていたようだったが、一つ一つ試合が進むに連れて相手のシューターに圧倒され自分のプレーが思うように出なかったし、ほんとにボールが怖く感じられました。

このような事から、私は、この遠征で、世界に出れば、自分はプレーや体格すべての面において、なんと小さいのだろうと思いました。

そして、もしまた、世界に出てプレーが出来るならば、この遠征で得た、いろいろな事を生かし、より大きなプレーヤーになりたいと思います。

筑波大　西山　清

我々日本チームの成績は、3勝5敗19位と不本位な成績で終ったが、スピード、パワー、テクニックをいろんな形で表わし見せてくれたこの大会は、我々の歩いて来たハンドボール人生、またこれから歩いて行こうとするハンドボール人生に大きな影響を与えた大会であった。高い打点からの豪快なシュート、ディフェンスでは少しでもすきを見せたら強引につっこんでくるパワーとスピードは日本では見ることが出来ないプレーばかりだった。こういったプレーをする選手が我々日本チームと同じ年令の中で行なわれるハンドボール試合の中で見られるのです。我々は彼らの年令を何度うたぐったことか、それほどすばらしい選手が多くいた。決勝戦のユーゴスラビア対ソ連では、さすが世界大会の決勝戦だなあと思わせるすばらしい試合だった。ソ連のサイド攻撃とユーゴスラビアの二段モーションから打つロングシュートの対決になったが、結局総合力でまさるソ連が25対20で2回連続の優勝チームに輝いた。それにしてもユーゴスラビアもソ連も、我々のやっているハンドボールとは別世界の中で行なわれているようにすら思えてくるほどだった。実際にあの西ドイツが11位になったのだからこの大会のレベルがわかる。

このような大会の中19位になったものの自分たちのイージーミスからの失点が多かったのと、それとディフェンスでの連繋のミスからの失点も目立った。こういったミスをなくさないかぎり、この体格の差やパワーの差はちょっと詰めることはむずかしいと思った。しかし僕は思ったのだけど、日本のプレーは見た目に派手なプレーにこだわりすぎではないかと思った。ハンドボールとはそんなもんじゃなく、もっとプレーに対して厳しくやるべきだと思った。だからもっとかわすプレーというか華麗なプレーよりも強引なプレーをおぼえてほしいと思う。僕もこれからは、もっと強引なプレーをやって行き、かつ他人には出来ないプレーを会得して行きたいと思っている。

次回はカナダで開催

IHF(国際ハンドボール連盟)は、第3回世界ジュニア選手権を一九八一年(昭56)に、男子はカナダ、女子はポルトガルで開くことを内定した。

また、これまで未定だった第9回世界女子選手権は、八二年(昭57)ハンガリーで行うことが正式決定した。男子は、同年西ドイツに、すでに決まっている。

リヒテンシュタインも仮加盟

IHFは、このほどリヒテンシュタインが仮加盟国になったことを明らかにした。

11月27日付で、中国が仮加盟となる前の手つづきである。

この結果、IHFの規模は、正式加盟国74、仮加盟国は、中国を含め6となり、史上初めて、正、仮合計80台をマークすることとなった。

このほか、パレスチナ、チリなど加盟申請中の国が、20近くあるといわれ、ロスアンゼルス・オリンピック(昭59)前には、加盟国は100台にのぼりそうである。

初参加した第2回世界女子ジュニア選手権(記録は前号)の体験から、今後の課題を提起し、報告としたい。

女子回顧

多彩な変化攻撃に活路が

世界女子ジュニア監督　白神邦雄

1から5位チームに対しては残念ながらテクニックパワー、スピード、ゲームコントロール等いずれも日本チーム以上であり、中下位程度の位置と考えられる。しかし、6位以下のチームに対しては今後の研究課題としてヨーロッパの情報収集さえ可能であれば充分に戦い得る事の出来る相手だと考える。だが、ゲームに於けるポイントゲッターの存在、あるいはヨーロッパスタイルのゲーム展開では、日本チームは一段も二段も考え及ばない点があり、さらに研究についても、日本の攻撃方法、防御方法、ゲームに対する日本人気質等の分析はすでになされている具体的例を表現するならば、日本の最も速い攻撃法である速攻はもうけっして確実な攻撃方法ではなくなっているということである。

攻撃面に於いては、速攻法と遅攻法に分けて考え、まず速攻は、従来日本の最も得意とする攻撃法であったが、すでにこれまでの方法は研究され簡単に得点に結びつける可能性は少ないと考える。従来速ければそれなりに可能性を生むことが出来て得点を得られたが現在、どのヨーロッパチームも日本に対し速攻を簡単に許さない。日本は、それに対する戦法を考え直し、新たに身長の高さ、手の長さ、速さ、正確性を考慮した速攻法を考えなければ速攻の意味はなくなる。しかし、いくら速攻法が非常に困難になったとはいえ、日本チームに取ってこれはやはり唯一の得点源であることの事実も否定できない。今後の課題としては2段3段速攻の確立であり、これこそ最大の武器となるであろう。遅攻法に於いてもパワー、持久力も然る事ながら、やはり高さ、横の幅、ボール展開の予測、読みに対する対策を考えなければならない。現在、日本リーグで活躍しているロングシューター、ミドルシューターが多くいるが、残念ながら現在のシューターでは、ヨーロッパ選手の高さの壁に直接挑むことは無謀としか考えられない。又展開面でも右から左、左から右にボールコースが決まっているが、ポジション固定による現在の展開では、横の幅の壁を破ぶることとも不可能であり、ポストプレーすら生かすことも出来ず相手防御の破壊につながる攻撃とはならない。今後、形態面での変化を望むことが出来ない現在、第1にブロックプレー、フェイント力、サイドシュートの強化を行ない、更に、ロングやミドルシュートのテクニックとしてクィックシュート、ステップシュート等、それにパスワークの上達を望みたい。

防御面に於いてヨーロッパ諸国との対戦を考えればやはり高さであり、体格比とパステクニック等が考えられよう。ヨーロッパスタイルはけっして華麗ではなく非常にオーソドックスなプレーではあるが、それ故、正確にかつスピーディである。その速さにフットワークが最後まで続かず高さに対してフットワークが遅れ、ポストプレーを許す結果となる。身長、体格の形態面での向上は今後も望めそうもなく防御全体のシステムの変化を望む方が妥当であり、賢明な方法と考える。と同時に、持久力によるフットワーク強化も急がなくてはならない。更に、サイド攻撃に対する対策も考慮しておく必要性があり、これは、センター強化の防御が成功してもサイド防御が破壊されれば何等効果を得た結果にならないからと考える。

又、ゴールキーパーに於いてヨーロッパ諸国のキーパーを観察したがゲームの流れを変え、自チームに有利に導くことの再三のプレーゲームコントロール術とでも言うべく技が目を引いた。

さて、今回のジュニア大会に於ける選手達の年令は非常に若く、選手達の精神面を考える場合、私生活とコートの上との切り替え、又はその間のコンディショニングモラル等、日本の選手達は未熟であったと観察する。ゲームに対しての切り替えが集中力と関係があるとすれば、今後指導者は充分に考えなければならない問題点ではなかろうか。

最後に今後世界に於いて日本が上位を目指すならば次の課題を解消される事を望みたい。第1に選手の経験不足、外国との交流を多くし、外人コンプレックスを解消させ外人に対しての攻撃、防御法を体で習得させる。第2に数多い外国交流の内から、対ヨーロッパの具体的な戦法を生み出し、日本独自の戦略方法を打ち出す事の出来る強化体制をあげておきたい。

報告 ⑤

IHF・レフェリーとコーチシンポジューム

安藤 純光
（日本協会常務理事）

1973年にブルガリアのブルガスにおいて開催されたIHFレフェリーセントラルコース（機関誌№116報告）において、すでにソビエットの提案する45秒ルールはデモンストレーションを交じえて紹介されている。以後さらにソビエットにおいて研究改善され、国内の競技では実施されている。

先に述べたように、今回のシンポジュームと期を同じくして開催されたTrophy of Yvgoslaviaの全競技が「45秒ルール」によって実施された。

初日の競技では、レフェリーもプレイヤーも、またオフィシャルも「45秒ルール」に不慣れのために生ずるいくつかのとまどいとトラブルに遭遇していた。しかし、日を重ね競技を重ねるにしたがって、円滑に運営されるようになった。

「45秒ルール」がどんな内容のルールであるのかを紹介するIHF／RSKのメンバーであるJanis Grinbergas（USSR）の講演を報告する。

『スポーツのもつ歴史において、戦術的な発展に目を向けると攻撃と防御との間に、相互に興味ある影響のあることに気づく。スポーツにおいて攻撃と同時に防御は、競技をより興味あるものにするために、ある意味で調和のある相互関係にある。その発展の傾向は、競技が色あせることを許さないための可能性をもっているが、しかし一方には、戦術的な方法や限度は競技が消極的な方向に向うのを阻止することが不可能な場合もある。

最近多くのハンドボールファンに対して、ハンドボールでもっとも魅力を感じる点は何かという質問をした。彼らの答えは「ダイナミックさ、そして闘争的な攻撃プレイとゴールキーパー」であった。ある人は、真に競技の合理性にかなったディフェンスについて興味を感じていると答えるかもしれない。しかし最後には、攻撃におけるダイナミックなプレーがハンドボールの華であることを認めるであろう。ハンドボールファンが興味を感じない競技とは、必ずしもミスが多いということによるものではない。その上にさらに攻撃においてダイナミックな競技を断念するか、またはそうするより仕方のないようなチームが、けちな負けや勝利にさえもこの消極的な方法を利用することにある。

このハンドボールの競技を傷つけるにすぎない矛盾は、今日までにたびたび見られた。この見のがすことができない攻撃側の故意の時間かせぎを行なった競技を見つけ出すのに記憶を深く掘りさげる必要もない。このような防御中心のそして時間かせぎの性質の競技が、ハンドボールファンにあくびをさせるのである。

1970年の世界選手権大会における競技の評価によると、攻撃時間のアベレージは38秒であったことを示している。得点に成功した攻撃は、全体の攻撃回数の48%であった。また30秒間持続した攻撃は全体の攻撃回数の44%であった。世界選手権大会における総攻撃回数3200回の86%は、おそくとも60秒の後に終っている。また98%はおそくとも120秒の後に終っている。この大会におけるもっとも長い攻撃時間は、6分5秒の間持続された。換言すれば、全体の競技時間の10%よりも長い時間である。その上、あるチームは競技中たった5回だけしかボールを所有することができなかった、という信じがたいこともあった。観衆は、このような長い攻撃の間、何をたのしめばよいのか？　ここに重大な質問の一つがある。レフェリーは、何のためにいるのか？　レフェリーは、競技の中のこのような時間かせぎを阻止すべきである。

われわれは、息の長い競技が活発なそして迅速な競技よりも合理的であることを認めるが、事実、「Slow」と合理性とは現在においてもまた過去においても同意語ではない。ゆっくりしたプレイが常に合理的なプレイを意味するものではない。しかし「Slowness」ということは、ハンドボール競技においてもっとも重要であるといわれている。もし、われわれがこの考えをなお一層発展させるならば、ハンドボール競技における合理性はダイナミックさよりも、また身体的あるいは技術的な力よりも重要であるという結論に到達することになる。

他の競技と同様に、ハンドボールも戦術なしで存在することはないであろう。しかし、合理性がスポーツの発展を助成するのであれば、スポーツの合理的な核心である戦術は正当化される。消極的な競技の戦術は、この条件を満すものではない。戦術は、しばしば彼らのチームの勝利を意味するものとして、われわれが望もうと望むまいと、消極的な競技は多くのスポーツ方法論研究者、トレーナースポーツ科学者そしてトップの指導的な役員たちによって強いられている。

勝利を望んで戦っている時間中は、ハンドボールそれ自身がどうあるべきかということは忘れられてしまうものだ。消極的な競技に対する観衆の反響と、この競技の様相に対する報酬は、この競技に対して大きなダメージを与えることになるが、競技のもつ美くしさと楽しさは、チームの勝利とは比較にならないものになっている。

数少ないよろこばしい例外のうちの一つは、ミュンヘン・オリンピックでのユーゴスラビアチームの勝利である。ユーゴスラビアは価値あるオリンピックの勝利者として説得力のある現代のハンドボールの利点を実証した。競技の美くしさやすべてのプレーヤーの適合のみならずまた可能な最大限の個人とチームの正確な動きは、室内ハンドボール競技の発展が、より一層最適な条件へ進むための模範的な競技であった。

しかし、そのモデルとなる競技は、ただ単に影響をあたえる能力

があるにすぎないであろう。かつて勝利を得たチームの中で、この評価ができる競技はごく限られたものであったろう。ほんのわずかなチームが、より一層ハンドボール競技を発展させるような方法で近い将来にオリンピックの勝利者になるための切り札を切ることができるであろう。そして同時に、それ自身結果として、ハンドボール競技の近代的な要求に対する答えとしてのトレーニングの構想を助成するのではなく、劣った技術や戦術でさえも成功させる方法を見出す危険性もある。

われわれは、室内ハンドボールの戦術が具体的なあるところまで到達しているという事実を立証することができる。また戦術的なもくろみが、ハンドボールにおける最も否定的な現象や消極的な競技に色目をつかい、このスポーツが不自然で人気のないものになる危険性があるということも立証することができる。われわれは、われわれのハンドボール競技をこの危険にさらさないように注意深く見守らなければならない。尺度は、妨げになる消極的な競技とその結果にあてられるべきである。攻撃における時間の制限は、これらの一つの方法として考えられなければならない。

攻撃における時間制限の必要性についてのディスカッションは、数年前にはじまった。そして、最初の実施のときがやって来た。Litvania における二つの国際トーナメントで、攻撃時間が45秒に制限された。それと同じルールがモスクワ選手権大会で採用された。

最初の試みは成功した。そして将来にわたっても成功するであろうことが約束された。結局1973年のすべての競技に45秒ルールが導入されるに至った。その最初の成功は、観客の数によって明らかにされた。1973年に行なわれた競技では、1972年より観客の数が35%も増加している。

間もなくわれわれは、若い世代のプレーヤーたちに対する新らしいルールの明確な影響を確めることができた。子供や少年は、すべてのことを速やかにすること、重要な瞬間に必要な決断をすること、重要な瞬間に必要な決断をすること、その場面を評価すること、ボールと彼ら自身を管理することをこの新らしいルールによって勧誘された。

以前には観客は、ハンドボール競技では競技場の中央部分では戦いがなく、ほとんどのチームはこの中央部分を歩いて通り過ぎていると非難した。この45秒ルールは競技場の中央部分をできるだけ早く通過することをプレーヤーに要求している。だから、われわれは今や嵐の中の波のようにゴールからゴールへころがるように攻撃を行なっている。

われわれのハンドボールの観衆は、最も近い将来において競技場のすべての場所で各プレーヤーがプレーすることを期待することができる。彼らの攻撃のための30秒あるいは45秒のほとんどを積極的にプレーすることによって、彼らの敵を追い出すバスケットボールやウォーターポロのプイーヤーはこのことをすでに実行している。

「はじめだけの難しさ」

45秒ルールの導入が、一流のチームにどんな影響を与えたかについては、後に詳しく述べる。しかしながら、私は世界のベストチームが非常に早くこのルールに対処したということを認めずにはいられない。われわれは、もう一度1970年の世界選手権大会の攻撃時間のアベレージが38秒であったことを思い出そう。そして今年のソビエトの男子選手権大会における攻撃時間のアベレージは35秒であり、その差はたった3秒であった。

もちろん、力の弱いチームは45秒ルールに彼ら自身を調和させることは容易ではなかった。しかしそれは最初のうちにすぎなかった。なぜならば、攻撃のための時間を制限するということは、プレーヤーとすべてのクラスのチームの能力の発達を促進するからである。もし、両方のチームのプレーが同じ力量と型であるならば、両方のチームが同じ攻撃のための時間をもつということは重要なことである。

45秒ルールは、各チームに勝利の可能性を同等に提出する。勝利をものにするかどうかは、技術の問題である。しかし今や、消極的な競技の方法をたくみに用いるチームが常に勝利するということはできなくなった。この障害は絶対に除去されなければならない。われわれは、すでにこのルールに慣れて実施している。

「この目的を達成するためのルール」

1、一回の攻撃を遂行するために、そのチームは45秒以上ボールを所有してはならない。45秒間はスローオフ、スローインあるいはゴールスロー、キーパースロー（ボールがスローをしたプレーヤーの手をはなれたとき）の瞬間に、またはプレーヤーがボールを所有した瞬間にはじまる。

（注）ボールを所有しているチームは、45秒の後には攻撃をやめさせられる。

（罰）45秒ルールのバイオレーションでは、ボールはフリースローのために他のチームに与えられる。フリースローは、ホイッスルの吹かれた所から行なわれる。

2、45秒間は、再び攻撃するチームのために始まる。―もし―

（a）相手チームのゴールキーパーがスローしたボール、あるいはシュートしたボールが相手のゴールポストやゴールクロスバーにあたってもどって来て、そのボールを攻撃チームが所有したとき。

（b）ディフェンスチームのプレーヤーが、危険な、反スポーツマンシップな、あるいはラフプレイを警告されたならば、一定の時間競技から除去されるか追い立てられる。

（c）レフェリースローされたボールを攻撃チームが所有したとき。

（d）コーナースローのとき。

3、この45秒の計時は、タイムキーパーによって行なわれる。

「系統的な教示」

プレーヤー（チーム）がボールを所有している。

1、プレーヤー（チーム）が、ボールを支配しているかプレーしている。

2、ボールを所有しているチームが45秒間以上ゴールにシュートしないでいることは、バイオーレーション（フリースロー）とみな

す。もし、そのチームが攻撃なしに競技を故意にひきのばしているならば、レフェリーはその「犯人」を罰する（消極的な競技のルールに従って）。それがたとえ45秒が切れる前だったとしてもある。

3、もし、チーム（プレーヤー）がボールを所有していて、そのボールに相手チームのプレーヤーがタッチしても、新らしく45秒を数える権利は与えられない。

4、もし、オフェンスプレーヤーがディフェンスチームに対してつけこもうとしてパスすることによってボールを所有している時間は、加えられる。

5、もしシュートしたプレーヤーが得点することができずボールがゴールキーパーあるいはゴールポストやクロスバーからもどって来たとき、彼のチームのプレーヤーがキャッチしたならば、45秒の改撃時間は新らしく計時する。

6、攻撃チームのボールの所有時間が消えるそのときに、フリースローが課せられたならば、タイムキーパーはフリースローが行なわれた後で45秒が終ることをアナウンスする。

7、タイムキーパーには、次のことが義務づけられる。

（a）チームがボールを所有した瞬間から計時をはじめる。そして、45秒の終了を合図（ゴング・サイレン・ホイッスル）によってレフェリーに知らせる。

（b）もし、掲示板（電光掲示板）がない場合には、拡声器を通じて、意のままになる攻撃時間（45秒）のうちの30秒が過ぎたことをアナウンスすること。

（c）ゲームブレイクの間の失なわれたオフェンスチームの攻撃時間をおぎなうためのレフェリーの決定に関して。

（d）ゴールキーパーがスローをした瞬間に計時を始める。

8、ゴールへシュートして、そのチームに新らしい45秒の計時が認定されるのは、ボールが相手のゴールのクロスバー、ゴールポストにあたってもどって来たり、ゴールキーパーがスローしたボールをオフェンスチームが再びキャッチしたときだけである。もし、ゴールキーパーにキャッチされたり得点に失敗したときには、ゴールキーパーの手をボールがはなれたときに45秒の計時がはじまる。もし、投げられたボールがディフェンスのブロックにあたり、なおボールをオフェンスチームが所有していれば、45秒の計時は続けられる。

9、警告、退場、追放をもって罰せられるバイオレイションのときは、45秒の計時は新らしくはじめられる。しかし、両チームのプレーヤーによって同時に行なわれた共通のバイオレーション（警告退場、追放）に関しては、これを適用しない。このような場合には45秒の計時は新らしくスタートしない。オフェンスチームが、ボールを所有している。

10、競技の故意のひきのばしである悪いフリースロー（ホイッスルが吹かれたときに、そこにボールを置かずに、後方へ投げる、後方へころがす、ボールをはなさないなど）において、それを犯したプレーヤーはきびしく罰せられる（警告、退場、追放によって）。

この点は、とくに明確にレフェリーによって実行されるべきである。これは、選手権大会の実行に規律とダイナミックさを与えることを意味する。

（注）開催者は、45秒を計時するためのストップウォッチとともに競技のための競技場を用意しなければならない。』

以上が講演の内容であるが、長い時間をかけて検討がつづけられているこの「45秒ルール」が果して、ハンドボール競技の競技規則として実現するかどうかは容易に判断できることではない。IHF／RSK委員長、カール・E・ヴァン氏は、「45秒ルール」についてはあまりのり気ではないようであった。このことは、今回のシンポジュームの冒頭に行なわれた「競技規則を新らたに改訂するに当って寄与する考え方の諸点」（本誌№178号）と題する講演からも推察することができる。

実際、この「45秒ルール」は、バスケットボールの30秒ルールに類似している。消極的な時間かせぎの競技は、ラフプレーとともにハンドボール競技のより良い発展を、渋滞させたり、阻止する好ましくない力をもっている。したがってハンドボール競技から除去されなければならない現象である。

しかし、現行の競技規則では、それが不可能であろうか。決してそうではない。現行の競技規則を充分に適用することによって、このことは可能である。ただ競技規則の運用に幾分の困難さがある。この点についての検討の余地があるのではないだろうか。IHF／RSKは、1981年8月から施行されるハンドボール競技規則を目下検討中である。

シンポジュームに参加した何人かの人々に、「45秒ルール」について意見を求めたが、私が聞いた人々の多くは、大体、カール・E・ヴァン氏と同じような考え方をもっているようであった。

（この項おわり）

◇おことわり、本誌は例年どおり1月は休刊、次号は55年2月に発行します。ご了承下さい。（編集部）

興奮再現。

BIG SOUNDS

実用最大出力4.2W

TRK-8030 ¥43,800

持ち運んで楽しむか

クリアでナチュラルな音質の実用最大出力4.2W(2.1W＋2.1W、EIAJ/DC)のパワー。12cmウーハー(中低音域用)と3.5cmツイーター(高音域用)採用のスピーカー・システムが再現するリアルなパワーサウンド、心ゆくまでお楽しみください。

- ●FM／AM2バンドラジオつき
- ●(クロム／ノーマル)テープセレクター採用
- ●フルオートストップ
- ●外部スピーカー端子つき(別売り APS-80)使用
- ●ラインイン、ラインアウト端子、マイク端子(R用、L用各1個)つき



ステレオ パディスコ8030 TRK-8030 ¥43,800

●電源DC：9V(単1×6) AC：100V 50/60Hz カーアダプター(別売りD-70) ●大きさ 幅41.2×高さ25.6×奥行12(cm) ●重さ 5.0kg(乾電池含む)

システム パディスコ

組んで楽しむか

パディスコ8030はシステムアップできるラジオカセット。専用外部スピーカー(APS-80)の接続により、迫力あるステレオ・サウンドがさらに倍増。また、プレヤー(HT-320)を接続すればレコード音楽も楽しめます。(MM形カートリッジイコライザー MCE-70が必要)



- ●専用外部スピーカー、APS-80 別売り 2本セット¥11,800
- ●レコードプレヤーHT-320 別売り ¥25,800(レコードプレヤーを接続するにはMM形カートリッジイコライザー〈MCE-70〉別売り ¥4,500が必要です)

▲上の写真はステレオパディスコ8030をシステムアップしたものの一例です。

★カセットレコーダーで録音したものは、個人として楽しむなどのほかは著作権法上、権利者に無断で使用できません。

★商品のお問合せ、クレジットのご相談、カタログのご請求は、お近くの日立の家電品取扱店へお気軽にどうぞ。

品質を大切にする〈技術の日立〉

HITACHI CASSETTE RECORDER

HITACHI

日立家電販売株式会社 〒105 東京都港区西新橋2-15-12(日立愛宕別館) TEL(03)502-2111

日立クレジット株式会社 〒105 東京都港区西新橋2-15-12(日立愛宕別館) TEL(03)503-2111

★「日立カセットレコーダーの保証書」は必ずお受けとりください。お買い上げの際に、販売店名、ご購入年月日が記入されているかを、お確かめになり、大切に保存してください。

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第一八一号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和五四年十一月二十五日印刷 昭和五四年十二月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京 谷区神南一ー一ー一
電話 代表（467）七〇九七
振替 東京 六ー五八三四八番
編集兼発行人 荒川清美
定価二百円（年間購読料三千三百円）

株式会社アシックス



鋭く攻めろ。

独創のソールがスピードとパワーを引き出す

ハンドボール競技におけるプレーヤーの「動き」を徹底的に究明してつくりあげた〈アシックスタイガー®ハンド〉のソールはごらんのとおりツマ先部とカカト部に穴をあけています。
この穴は プレーヤーが力をかけると真空となり フロアにピタッと吸いつくようになっています。
つまりスリップを100%防ぐための設計です。
従って どのような状況のプレーにもダッシュ ストップが完璧で 思いのままに鋭く速く動作できます。
また さまざまな方向へのスタートダッシュ、ストップターンも完全です。
プレーヤーのスピードとテクニックを この吸盤の原理を応用した特殊なソールが 確実に引き出します。

asics TIGER®
HANDBALL SHOES
ハンドボール

★ハンドボールLE
- 良質表革甲被
- ノンスリップ特殊意匠底
- 代表選手用
- ホワイト×レッド

サイズ 22.5〜28.0
標準小売価格 ￥9,000

